

## 「月食を撮る (5)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

月食はその後も、恐ろしく正確に食分を増加していった。人類は明日の天気も正確に予報できないのに、100年先の月食を、1分の狂いもなく予報できるのだから素晴らしい。これは太陽系天体が極めて正確に運行している証拠でもある。



私は同僚が持っていた双眼鏡で、月食中の月の明暗境界線を目視で観察してみた。



じっと観察していると、わずか1分間で、地球の影が月面の右上に向かって移動していくのがわかった。



皆既になる直前、月の右上だけに太陽光が残り、残りは赤銅色に染まり出した。私はこの時も双眼鏡で月を見ていたが、月の右上が淡く青い光で覆われてゆく様子が非常に美しかった。

このころになると、不思議なことに月が急に立体的に見えてくる。通常の満月は、太陽光がほぼ正面(地球側)から当たっているため、月は平坦な円盤状に見えて、立体感に乏しい。しかし、皆既前後の満月は、月そのものは地球の影の中にあるものの、わずかに斜めから光が射して、立体感が増すのだ。

3年生の子どもたちの中にも、この「立体感のある満月」に気付いていた者があった。右図がその記録で、「ふつうの月はのりで貼った感じ」「月食中の月は立体のように見えた」と事実を非常に的確に記録している。今回の月食では、皆既継続時間(月が地球の影に完全に入っている時間)が1時間以上あり、この「赤くて立体感のある月」を長時間観察することができた。

